

【Advanced II】

筆記試験 <理論> 例題集 ③

(90分)

I. 次の楽譜を見て、各問に答えなさい。

The musical score is in B-flat major (two flats) and 4/4 time. It consists of three systems of music. The first system contains measures 1 through 5. Above measure 1 is a box labeled ①, above measure 2 is ②, above measure 3 is ③, above measure 4 is ④, above measure 5 is (イ), and above measure 5 is also a box labeled ⑤. The second system contains measures 6 through 7. Above measure 6 is a box labeled B, above measure 7 is C, above measure 7 is D, above measure 7 is (ウ), above measure 7 is (エ), and above measure 7 is ⑦. The third system contains measures 8 through 9. Above measure 8 is a box labeled E and ⑧. Roman numerals (ア), (イ), (ウ), and (エ) are placed above the notes in measures 4, 5, 6, and 7 respectively.

1. ①～⑧にあてはまるコード・ネームを書きなさい。テンションも記入すること。

- ① _____ ② _____ ③ _____ ④ _____
- ⑤ _____ ⑥ _____ ⑦ _____ ⑧ _____

2. **A**～**E**のコードの度数と機能を書きなさい。
 (注) 機能の表示は以下の略号で答えなさい。

Tonic → T Dominant → D Subdominant → S
 Subdominant Minor → Sm Secondary Dominant → Sec.D
 Sub Secondary Dominant → Sub Sec.D

	度数	機能
A		
B		
C		
D		
E		

3. (ア)～(エ)のコードに対する適切なアベイラブル・ノート・スケール名を書きなさい(開始音名も記入すること)。

(ア) _____ (イ) _____
 (ウ) _____ (エ) _____

●コード判別、コードの度数と機能、アベイラブル・ノート・スケールに関する問題です。Advanced IIでは、ノン・ダイアトニック・コード(代理コードやセカンダリー・ドミナント)を含めた各種のコードの判別と、コードに含まれるテンションの度数を答える必要があります。テンションの度数はコードのルートを基準に割り出すことができますが、それだけではなく、「そのコードに使用可能なテンション」であるかどうかを含めた、総合的な理解が望ましいところです。
 さらに、それらノン・ダイアトニック・コードの機能、コードの種別に対応したアベイラブル・ノート・スケール(ドミナント7thコードにおける複数のスケールを含む)についても把握しておきましょう。アベイラブル・ノート・スケールについては問題V.でもとり上げています。

- (正解) 1. ① Am7(^b5)(11) ② D7([#]9, ^b13) ③ Gm7(9,11) ④ C7(9,[#]11,13) ⑤ Fm7(9) ⑥ A^b7(9,13)
 ⑦ F7(13) ⑧ Bmaj7

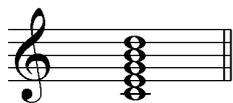
2.

	度数	機能
A	V 7/IV	Sec.D
B	^b VII7	Sm
C	III _m 7	T
D	V 7/II	Sec.D
E	^b II maj7	Sm

3. (ア)C リディアン・ドミナント・スケール (イ)F オルタード・(ドミナント・)スケール
 (ウ)G ハーモニック・マイナーP5↓スケール (エ)C ドリアン・スケール

II. 例にならって、次のコード・ネームの和音の基本形を書きなさい。

(例) Cmaj7⁽⁹⁾



A^bm7⁽⁹⁾⁽¹¹⁾
Bm7^(b5)⁽¹¹⁾
A7^(b13)^(#9)
D^bmaj7^(#11)⁽⁹⁾
Fmmaj7⁽⁹⁾

●Advanced II では、テンションも含めたコードの構成音を問われます。ここでも、コードとテンション・ノートの関係についての理解が必要になります。

(正解)

A^bm7⁽⁹⁾⁽¹¹⁾
Bm7^(b5)⁽¹¹⁾
A7^(b13)^(#9)
D^bmaj7^(#11)⁽⁹⁾
Fmmaj7⁽⁹⁾

Ⅲ. 次の曲を、1～2小節の例に続けて、3小節目以降をリハーモナイズしなさい。コードの数は必要に応じて増やしてもかまいません。

〈オリジナル〉

〈リハーモナイズ〉

●原曲のコードをリハーモナイズする問題では、メロディーに合い、曲の流れとしても自然なコード付けをすることが求められます。リハーモナイズは、元のコードの代理コードの使用、ドミナント・コードのトゥー・ファイブ等への分割、さらにセカンダリー・ドミナントの付加といった方法を使うのが一般的です。（これらについては、『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』4章（61ページ～）で詳しく解説されています。）
 正解は一つではありませんので、いろいろな可能性を試みながら、メロディーとの相性に注意してまとめていきましょう。

(解答例) 〈リハーモナイズ〉

IV. 下の表は、ノン・ダイアトニック・コードの度数と機能について書かれたものです。例にならって表の空欄をうめなさい。

(注)機能の表示は以下の略号で答えなさい。

Tonic→T Dominant→D Subdominant→S
 Subdominant Minor→Sm Secondary Dominant→Sec.D

Key	度数	コード・ネーム	機能
例 C	^b II maj7	D ^b maj7	Sm
A ^b	^b VII7		
	^b VI7	C7	
F		A7	
A		Fmaj7	
	V7/II	G7	
D	^b VIImaj7		
	[#] IVm7(^b 5)	Am7(^b 5)	
G		F [#] 7	
D ^b	^b II7		
F [#]		B7	

●ノン・ダイアトニック・コードの機能についてのまとめです。各種の代理コードやセカンダリー・ドミナントについて、キーと度数の関係、およびその機能を網羅的に把握しておくことが必要です。これらに関しては『セオリー・オブ・ポップラー&ジャズ 2』第5章、特に代理コードの機能については30ページの表をしっかりと頭に入れておくと良いでしょう。

(正解)

Key	度数	コード・ネーム	機能
A ^b	^b VII7	G ^b 7	Sm
E	^b VI7	C7	Sm
F	V7/VI	A7	Sec.D
A	^b VI maj7	Fmaj7	Sm
B ^b	V7/II	G7	Sec.D
D	^b VIImaj7	Cmaj7	S
E ^b	[#] IVm7(^b 5)	Am7(^b 5)	T (S)
G	V7/III	F [#] 7	Sec.D
D ^b	^b II7	D7	D
F [#]	IV7	B7	S

V. 例にならって、①～⑦のコードとメロディーに対応した、適切なアベイラブル・ノート・スケールとテンション・ノートの音名と度数を書きなさい。また、アボイド・ノートがある場合はアボイド・ノートの音名と度数も書きなさい。
(アボイド・ノートがない場合はNo Avoidと書きなさい。)

① Bm7(b5) ② Bb7 ③ Am7 Ab7 Gm7 ④ C7 Cm7 F7

⑤ Bbmaj7 Bbm6 Am7 D7 ⑥ G7 ⑦ Gm7 C7 (例) Fmaj7

●楽譜からアベイラブル・ノート・スケールを導き出し、五線にスケールを、またテンションとアボイドを音名と度数で書き出す問題です。Advanced IIでは、ノン・ダイアトニック・コードについても問われます。『セオリー・オブ・ポップ・ジャズ 3』第10章 (35～66ページ) の内容をよく整理して覚えておくことが大切です。

問題ではこれに基づいて、曲のキーに対する度数、さらにメロディーに含まれる音 (テンション・ノートとなり得る音) から、適切なアベイラブル・ノート・スケールおよびテンション、アボイドを判断します。特にドミナント7thコードの場合はメロディーをよく考慮して、最適なものを選択しましょう。

なお、③では、ダイアトニック・コードとしてフリジアン・スケールが基本ですが、変則的なケースとしてb2ndの代わりに9thを含むドリアン・スケールと考えるも正解です (『セオリー・オブ・ポップ・ジャズ 4』40ページ)。

(正解)

(例) スケール: F イオニアン・スケール

Tension = G (9th)
Avoid = B^b (4th)

① スケール: B ロクリアン・スケール

Tension = E (11th) G^b (13th)
Avoid = C^b (2nd)

② スケール: B^b リディアン・ドミナント・スケール

Tension = C (9th) E (#11th) G (13th)
Avoid = No Avoid

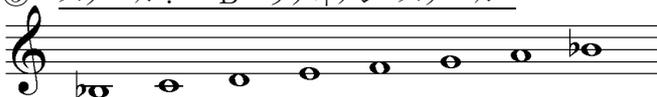
③ スケール: A フリジアン・スケール (※またはA ドリアン・スケール)

Tension = D (11th) (※B (9th))
Avoid = B^b (b2nd) F (b6th)
(※ドリアンの場合: Avoid = F[#] (6th))

④ スケール: C ミクソリディアン・スケール

Tension = D (9th) A (13th)
Avoid = F (4th)

⑤ スケール: B^b リディアン・スケール



Tension = C (9th) E (#11th)

Avoid = No Avoid

⑥ スケール: G リディアン・ドミナント・スケール



Tension = A (9th) C[#](#11th) E(13th)

Avoid = No Avoid

⑦ スケール: C オルタード・スケール



Tension = D^b(^b9th) E^b(#9th)

F[#](#11th) A^b(^b13th)

Avoid =No Avoid

VI. 次の曲に対し4 Way closeでVoicingを行ないなさい。*印の箇所にはトップ・ノート以外にもテンションを使用しなさい。また、ベース音も書きなさい。

●メロディーに対するクローズ・ボイシングです。クローズ・ボイシングは、まずメロディーの音をトップとして、その下にコード・トーンを順に配置します。テンションを使用するには、各コードのアベイラブル・ノート・スケールを考慮して付加可能なテンション・ノートを見つけます。テンションを付加した場合はその直下のコード・トーンを省略します。（主として、ルートの代わりに9thを使用する 경우가多くなるでしょう。なお、*印以外の箇所でもテンションを付加するかどうかは任意です。）

ドミナント7thコードのテンションは、メロディーによっては9th、^b9th等複数の候補が使用可能です。この例のD7、E7ではいずれも使うことができますが、ここではD7の箇所（2、7小節目）でラスト・サウンド・アタックにより9th→^b9thと変化させた例を示しました。その他、この解答例に限らずさまざまな可能性があります。

以上のクローズ・ボイシングの手法については『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』第1章（6～31ページ）および『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 4』第12章I～IV（8～25ページ）に整理されています。

(解答例)

VII. 次の曲に対し、4声～5声でOpen Voicingを行ないなさい。*印の箇所にはトップ・ノート以外にもテンションを使用しなさい。

* Cmaj7 * Fm7 * B^b7 Em7 A7 Dm7 * G7 Cmaj7 Gm7 C7

Fmaj7 * B^b7 Am7 * D7 Dm7 * G7 C6

●メロディーに対するオープン・ボイスイングです。Advanced Iと同様、シンプル・オープン・ハーモニー、Drop2、Drop3、Drop2&4あるいはスプレッド・ボイスイング等の方法を適宜組み合わせてボイスイングします。Drop2やDrop3でできた新たな2nd、3rdボイスがテンションに変更可能であれば、テンションを使用することができます。ドミナント7thコードでのテンションの使い方はクローズ・ボイスイングと同様ですが、2ndや3rdボイスが5th音となった場合には13thまたは^b13thに変化させます。なお、1小節目の2拍目は、この解答例ではメロディーのC音との関係でmaj7thの代わりに6thを使っています。

以上、オープン・ボイスイングのさまざまな方法や注意点については、『ピアノ・パフォーマンス 4<改訂版>』第2章(32～48ページ)および『セオリー・オブ・ポピュラー&ジャズ 4』第12章V(26～32ページ)に整理されているので、譜面上でイメージできるように練習しておくといいでしょう。

(解答例)

Cmaj7 Fm7 B^b7 Em7 A7 Dm7 G7 Cmaj7 Gm7 C7

Fmaj7 B^b7 Am7 D7 Dm7 G7 C6